

# 「魔法のダイアリー」プロジェクト 最終成果報告書

報告者氏名：岡本 崇

所属：大分県教育センター

記録日：平成31年 1月 27日

キーワード：自閉症、生活支援

## 【対象者の情報】

○年 齢 45歳

## ○障害名と生活の状況

◎自閉症 障害者手帳 B2

共同生活援助（グループホーム）で月～金、自宅で土日の生活

グループホームから職業実習として、クリーニング会社で勤務

## ○障害と困難の内容

<性格・行動・他者とのかかわりの実態>

- ・温厚で、親しい人との関わりを好む
- ・失敗することに非常に強い嫌悪感を持ち、困難を感じる場面や自分のこだわりのあること（パターン化した行動など）が叶わない場合、パニックになることがある。時間が経過して落ち着きを取り戻した際に、非常に強い反省と自己嫌悪感を示す
- ・買い物などで他人との関わりが必要な場面では、多少のぎこちなさはあるものの、必要最低限の会話などが可能で、関わりに困難を生じる場面は少ない
- ・機械・機器への親和性が高く、自分で操作することを好む

<自宅での生活に関わる実態>

- ・例えばテレビの時間・行動様式など、ある一定のパターンのある生活を好む
- ・掃除・調理などの家事の手伝いを好んで行い、小遣いをもらうことを楽しみにしている
- ・自宅での余暇時間は、ある程度自分の自由になる空間を好み、自室で自分の好きなモチーフの絵や文字を描いたり、好きな番組を録画したVHSビデオ鑑賞などをして過ごす

<余暇利用・社会生活に関わる実態>

- ・母親と一緒に商業施設での買い物などをすることを好む
- ・自分の小遣いで買い物（絵を描くためのペンなど）をすることを好む。メーカーやロットナンバーなどに強いこだわりがあり、理想のものを求めて数店舗を歩いて回ることもある。そのこと自体がストレスの元になったり、親の負担になったりすることがある
- ・買い物時は、こだわりや好みから、自分の好きな場所に行きたいという希望を持っている。しかし、母親の歩行がやや困難であることから、行動範囲が制限されることが多い。単独での行動で困難になる場面はほとんどないが、連絡手段がないため、母親の目の届く範囲に行動が限定される
- ・父親・母親と一緒に自家用車に乗ってレジャー施設などを訪れることを好む。同じ場所を週ごとにローテーションして通うことが多い



図1 文房具などに強いこだわりを示す様子

## 【活動進捗】

### ○ねらいと活動による方向性の確認状況

- ・情報機器を導入することで、インターネットを介した各種サービスを利用する方法を知り、永続的に QOL を向上する
- ・親しみやすく無理のない形で情報機器を導入することでストレスなく生活様式の利便性を向上させ、親の物理的・心理的負担を大幅に軽減する

### ○実施期間

- ・平成30年7月～（継続中）

○実施者：岡本 崇

○対象児の関係：きょうだい（弟）

## 【活動内容と対象者の変化】

### ○対象者を取り巻く状況

#### 電子機器の恩恵を受けて育った最初の世代

対象者は1973年生まれの45歳である。この世代は、生まれたときからテレビ・ビデオなどの電子機器に囲まれていた世代である。対象者は、機械・機器に親和性が高いこともあり、養護学校高等部在学期間中は、テレビゲームを通して金銭の学習をしたり、テレビ番組やビデオを通して言語や生活を学ぶなど、そのテクノロジーの恩恵を十分に受けてきた最初の世代とも言える。卒業後、成人施設に入所した後も、オートフォーカスカメラで写真を撮影したり、好きな番組の録画をしたり、気に入ったコンテンツを購入したものをビデオデッキで鑑賞したりするなど、実用・趣味の道具として電子機器を活用してきた。その様子は、他の同級生の保護者から「余暇を楽しむ趣味があって羨ましい」と言われるほどであった。生活の安定は心理的な安定にも繋がるため、電子機器の活用は、対象者と親にとって、非常に大きな強みであった。

#### テクノロジーの変遷と、それに追従できない要因

しかし、学校卒業から年月がたち、当時の電子機器が時代遅れの「アナクロテクノロジー」と化してしまった。それにも関わらず、対象者はいまだに当時の電子機器を活用しており、新世代の機器を導入することはできずにいる。そのため、機器の活用の存続の危機に直面している。機器を使えないということは、趣味と生活の柱を失うということでもある。対象者が生まれた1970年代初頭は、電子機器の大衆化が一気に進んだ年代である。ここでは、電子機器の第1世代として「アナログ電子機器世代」と名付ける。テレビ、カセットレコーダー、ビデオデッキなどがこの世代に属する。この世代の機器は機械式の道具の延長の性格を持っており、それぞれのメーカーやプロダクトごとの操作性の違いや互換性のなさが特徴でもある。対象者が現在も活用している電子機器は、この第1世代である。

この後、対象者の高等部卒業とほぼ同じ時期である1990年代に、デジタル電子機器が台頭してきた。CD、DVDなどの物理メディアを使ってコンテンツを利用するのが特徴である。これを電子機器の第2世代として「デジタル電子機器世代」と名付ける。しかし、対象者は学校を卒業しており、入所施設で生活をしてきたため、この世代の機器とはほとんど関わっていない。その段階では第1世代の機器は十分に現役であったため、特に不自由なく活用できており、第2世代に移行することなく生活してきた。

2000年代からは、パソコンやフィーチャーフォンが生活に入り込んできた。第3世代で

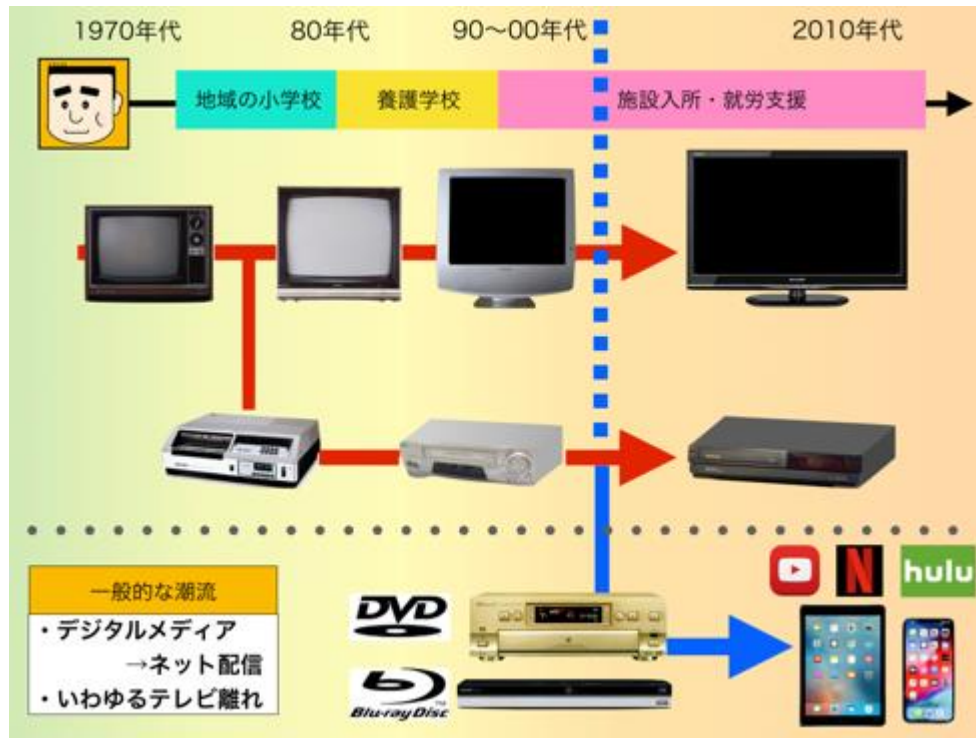


図2 テクノロジーの変遷と対象者の関わり

ある「情報機器世代」となるわけだが、この頃には対象者の親世代は定年退職を迎える年齢になっている。親世代は頻繁に報道される詐欺事件や情報流出などを目にする中で、ハイテクが持つ「人間味のなさ」「得体の知れなさ」を毛嫌いする傾向が強く、活用へと至ることはない。このようにして、アナクロテクノロジーから離れられず、新しい機器とは無縁の生活様式が出来上がってしまったわけである。

「過去の強み」が「現在の不安」となり、「将来の困難」となる

前述の通り、対象者が利用している世代の機器には、メーカーやプロダクトごとの操作性の違いや互換性のなさがある。対象者のように自閉症者の場合は、その障害特性が新たな障壁となっている。障害特性に起因したいわゆる「こだわり」を持って趣味や生活の道具として活用していた場合、「〇〇のメーカーの型番△△番台の製品」という指名購入が必要となるなど、さらに利便性を下げて

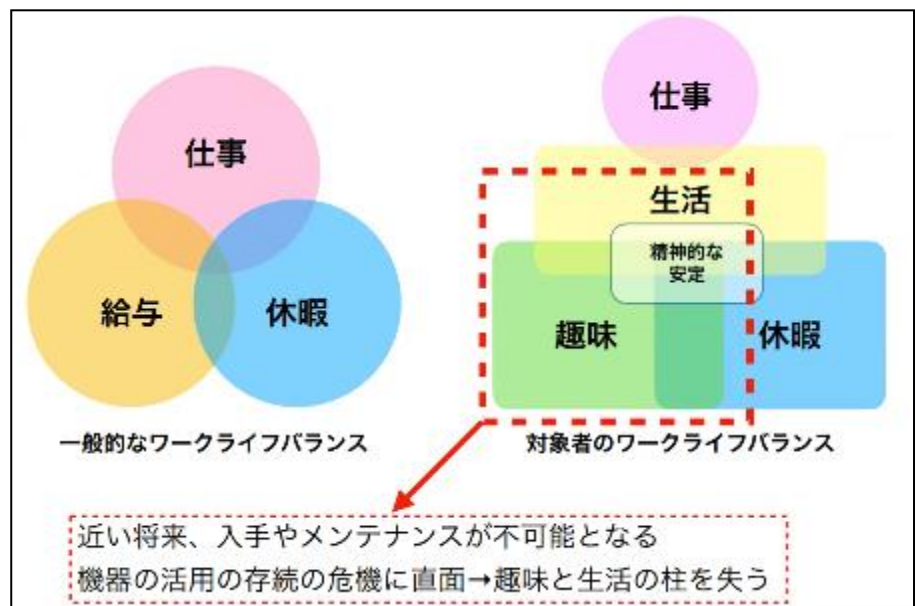


図3 対象者のワークライフバランス

いる。これが負のスパイラルとなっており、アナクロテクノロジーへの依存となり、新規のテクノロジーへの移行を困難にしている。第1世代の機器の新製品が販売数を大幅に減少している現在、本人及び親の不安感へとつながっている。近い将来、入手やメンテナンスが不可能となり、必ず困難な状況に直面することがわかっているにもかかわらず、新世代の機器への移行が進まないのは、このような状況があるためである。



## 「隠れ困難」をはらむ社会的状況にある中年期障がい者

第1世代の情報機器の特徴の一つに、情報が一方通行であるという点がある。すると、情報の収集が困難になってくる。親には第1世代の機器が使えなくなるという不安はあるものの、それが早急に対策の必要なレベルであるという危機感までには至るほどの情報が伝わっていない。現時点で、すでに自分がいわゆる情報弱者であるという認識が希薄なのである。本人が意識しないうちに「隠れ困難」は拡大し、高齢化による買い物難民化や災害時などの情報収集の難しさへとつながっていく。高齢の親世代の困難は、その子どもである中年期障害者の困難へと直結しているのである。

### ○対象者自身の事前の状況

ここで改めて、アナログ電子機器を活用している対象者の現状と困難な状況を整理する。

#### VHSビデオの利用

- ・ これまでに撮りためている数百本に及ぶテープの保管（場所・管理）
- ・ 古いコンテンツの劣化による不具合
- ・ 再生機器の故障や新規機種への購入の難しさ
- ・ メディアの流通の減少
- ・ 新規コンテンツの減少
- ・ レンタルコンテンツの選択肢の少なさ
- ・ 移動の際に毎回大量のビデオテープを持ち運ぶ必要性

#### フィルムカメラ

- ・ DPE店舗の減少
- ・ フィルム購入の困難さ
- ・ 10年ほど前からデジカメへの置き換えを何度か試みてきたが、「こだわりの強さ」から、うまくいかなかった
- ・ 撮影したものを物理印刷して見たい（大きく見たい）ためデジカメの画面では満足できない

#### 連絡手段のなさ

- ・ 携帯電話を持っていないため、親とはぐれないように外出先が限られる
- ・ 本人の希望があり、行動上の課題が少ないにも関わらず、行動範囲や場所が親の目の届く範囲に限定される

#### 親の願い

- ・ 永続的な趣味の手段の確保
- ・ 連絡手段の確保
- ・ 困った時に対象者がレスキューしてもらう手段の確保
- ・ 災害時の対応(災害情報、避難情報、ハザードマップ)

### ○活動の具体的内容

#### 『永続的な QOL の向上』のために

本実践で実現したいのは、対象者が永続的に趣味や生活を継続することができ、親が抱える将来に対する不安を軽減することである。そのためには、『永続的な』活用を身につけることが



図4 趣味のコンテンツに囲まれた部屋の様子

必要となる。例えば、現在流通している CD や DVD などの再生機器の使い方を覚えさせたとしても、数年後にはアナクロテクノロジー化することが予想される。そこで、発想を転換し、活用できる電子機器の世代を単純にアップデートするのではなく、コンテンツへと到達するためのフェーズを変えることとした。

先述の電子機器の第1～3世代で言えば、現在は第3世代の「情報機器世代」に属すると言える。しかし、2010年代から、そのフェーズは大きく転換している。現在は、情報機器そのもので物理メディアを使ってコンテンツを再生するのではなく、情報機器で「ネットサービスを利用する」フェーズに移っていると言える。例えばスマートフォンは、物理メディアを使用することなく、Google や Amazon といったネットサービスを利用するための「器」となっている。その利用・操作は機器そのものの物理ボタンではなく、画面内のサービスの UI に依存する。各種サービスは、利用者の利便性を非常に重視しているため、一旦 UI の操作を覚えれば、機器の世代交代に関わらず対応可能となる。ネットサービスそのものは継続性が高いため、実質的に『永続的な QOL の向上』に繋がると考えた。そこで、より一般的で利用しやすいサイズ・使用感の機器を活用し、より永続性が高いと思われるネットサービスを選定して利用するようにと考えた。

#### 『親しみやすく無理のない導入』のために

本実践で最も重視したいと考えているのは、対象者と親がこれまで生活してきた軌跡である45年間の歴史に最大限の敬意を払い、その生活スタイルの維持・継続を最優先するという点である。中年期の自閉症者にとって、現在の生活とは、長い時間をかけて外界と折り合いをつけながら大切に育んできた、変更・代替が困難な文化であり生活様式である。実際、この10年間で何度もデジタルカメラなどを使うように勧めてきても拒否感が強く、定着には至らなかった。活用するテクノロジーは変更したとしても、『親しみやすく無理のない』形で、ストレスなく生活様式の利便性を向上したい。そうすることで、本人及び親の物理的・心理的負担を大幅に軽減することが可能であろうと考える。導入には「テクノロジーを特段意識せず、ごく自然に活用できる」ことが必要となる。

#### こだわりの傾向の解釈

上記のような導入を進めるためには、対象者が受け入れやすいやり方で機器の導入を進めなければならない。そのためには、これまでの経緯を丁寧に紐解き、分析する必要がある。

そこで、対象者の「こだわり」について、以下のようにまとめ、解釈した。

#### <こだわりの傾向の解釈①>

対象者は、ビデオデッキに強い「こだわり」があり、メーカーやリモコン、操作ボタンなどの変更を拒んでいた。その一方で、テレビに関しては、メーカー等への「こだわり」はほとんどなく、変化を受け入れていた。これらのことから、対象者の「こだわり」の対象は以下のようなものだったのではないかと考えた。

- ・好みのコンテンツの好みの場面を切り取って再生するための道具であるビデオデッキでは、早送り・巻き戻しなど多くの操作を行うため、直接操作感に結び付く操作形態・リモコン等に「こだわり」を持ち、変化への対応が困難
- ・テレビは、番組（もしくはビデオコンテンツ）を表示するだけの「器」であるため、変化への対応が比較的容易

そのため、操作形態などに独自性が少ないもの、物理ボタンなどの類似性が少ないもの、汎用性のあるものであれば、こだわりが少なくなり、代替可能と考えた。

<こだわりの傾向の解釈②>

対象者の基本的なライフスタイル・嗜好は、養護学校在学期間中に確立したものであると考えられる。これは、学校に通っている期間には、外部からの刺激や指導を受ける機会が多く、それらの刺激が、生活様式の固定化を防止していたのではないかと考える。対象者は卒業後30年近くの年月を経過しており、ライフスタイル・嗜好はかなり固定化している。そのため、一旦確立したライフスタイル

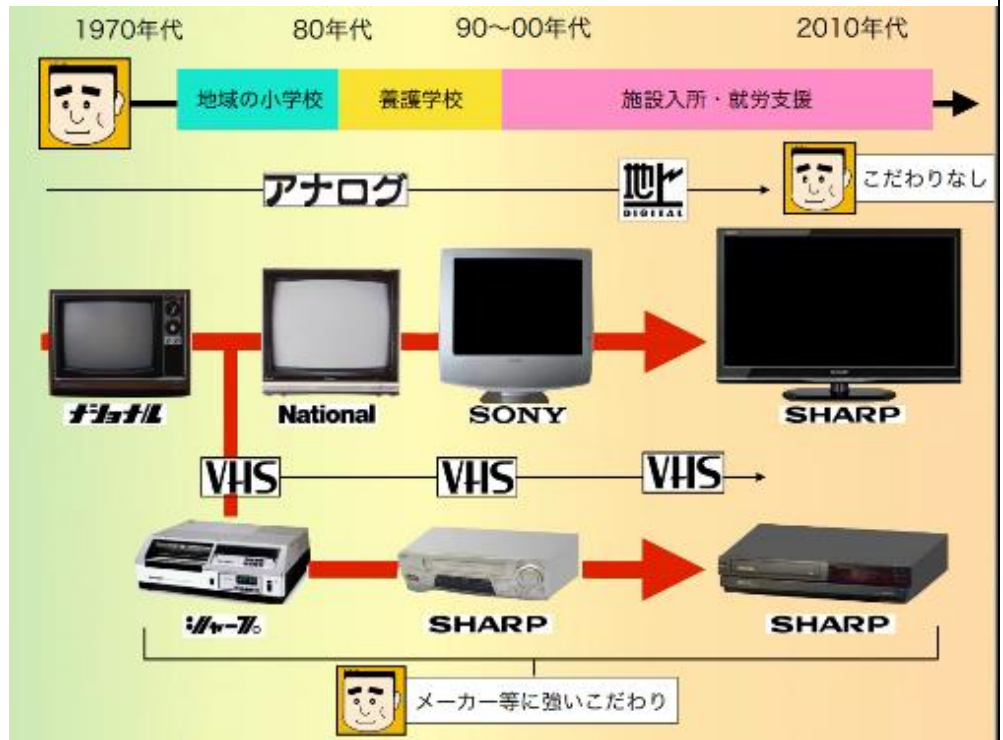


図5 機器とこだわりの関連

は、変更が困難と考えられる。ただし、外部からの適切な刺激があれば、新たなライフスタイルを確立できる可能性もあるとも考えられる。

実践1：ビデオ視聴デバイスとしてのiPadの導入

導入した機器

- ・ iPad Air
- ・ Wi-Fi環境の導入(光インターネット)

導入の経緯

対象者は、休日に自宅の自室で一人で、これまでに撮り溜めたVHSビデオを見ることを非常に楽しみにしている。マンションのケーブルテレビの受信システムの更新にもなると、視聴可能チャンネルが変更になり、見たい(録画したい)番組が見られずパニック状態になることが予想された。例えば他所で録画したビデオテープで視聴するなどの代替の手段を準備することは、長い目で見ると合理的ではない。これまで全く使ったことのないテクノロジーを導入し、新たな活用法を模索する方がより合理的であると考えた。そこで、この時期に合わせて、iPadを導入することとした。これは、「休日に自宅の自室で一人で」という生活スタイルを変えることなく、視聴コンテンツのみを変更できるためである。

コンテンツの多様性から、使用するサービスは

- ・ Amazonプライムビデオ
- ・ YouTube

とした。



プライムビデオ



YouTube

【導入のタイミング】

古いVHSの機器を利用していることから、年に3~4回程度の頻度で不具合が発生する。その都度、対象者が母親に不具合を告げ、母親から実践者へと電話で連絡することで不具合に対応していた。対象者が自宅に戻るのが週末だけであること、母親の機器に対する知識とスキルが低

いことなどがあり、電話では解決が難しくなっていた。そのため、実践者が実際に自宅を訪問して対面で実機を提示しながら対応することが必要になっていた。実践者との時間が合いにくいこともあったため、実際のメーカーや型番などに非常に強い「こだわり」を持つため、修理が完了するまでに他のビデオデッキを代替として与えても、嫌がるが多かった。このような状況は、対象者にとって、フラストレーションが溜まる状況だった。そこで、あえてVHSのビデオデッキがトラブルを起こしたタイミングで、代替の機器としてiPadの使用を提案した。ビデオデッキではなく、あえて全く異なる形状・操作形態の機器を提案することで、こだわりを回避することができる考えたためである。

#### これまでの様子

(過去に放送された好きな刑事ドラマを見る場合)

- ・録画したビデオ（もしくは販売され購入したビデオ）のコンテンツを見る。

録画したコンテンツの中の、特定の場面だけを繰り返し見る

(刑事ドラマの例:オープニングテーマ→早送り→犯人を追うシーン→早送り→CM→エンディング→巻き戻し→オープニング...を何度も繰り返す)

#### 問題点

- ・ビデオテープの管理の問題(劣化、保管場所、持ち運び)
- ・早送り等の多用によるビデオデッキの故障
- ・所持していないコンテンツを見ることができない
- ・新規コンテンツがほとんど発売されないため、新しいタイトルなどへの広がりほとんどない。趣味のメディアとしては先細りの状態である
- ・長い期間、期待するコンテンツが発売されないと、見通しの立たなさからパニックになることがある

#### iPad導入後

好みのタイトルを再生リスト化し、再生マーカーを指で移動させながら、再生時間カウンターで好みの場面を選び出し、再生する。

#### 導入後の様子

当初の予想に反して、非常にすんなりと導入することができた。対象者にとっても、「テレビ同様に視聴することができる」iPadは、比較的自然而合理的であったと考えられる。ちょうどテレビが視聴できなくなるというタイミングも良かったと思われる。また、キーボード入力未経験の対象者にとって、音声による検索方法もストレスがなく自然而であった。

導入初日から、古い時代劇や刑事ドラマなどはAmazonプライム、コマーシャル動画などはYouTubeと使い分けるなどもできるようになった。1ヶ月ほど使用した段階では、VHSビデオでの視聴は全視聴時間の10分の1ほどになり、完全移行が見込めるまでになっている。対象者本人も、テレビなどでこれまでに見たことがある最新機器(iPad)を使いこなしているという事は、「かっこいい」という喜びにつながっている。



## 生活面の維持および変化

まずは、サービス利用のためのiPadの導入は成功であった。学齢児童生徒にとっては、iPadなどの機器の望ましくない活用の仕方として挙げられることの多いYouTube視聴だが、これまでの生活スタイルとして、余暇の視聴時間の約束などが成立していたビデオ視聴の代替であったため、問題点はほとんどなかった。むしろ、生活スタイルを維持したままの趣味の永続性という点では、メリットが非常に大きかった。また、これまで、一方通行であるメディアの特性から、見逃した番組は再放送や特番放送、販売などをやみくもに待つ状態だった。見通しのなさからフラストレーションがたまるが多かったが、自分からコンテンツを探ることができることによさも実感できているようである。

ただ、現時点（H31.2.4現在）では、週末に帰宅する自宅ではiPad、グループホームにおいてはVHSである。グループホームでは、Wi-Fiの環境などから、iPadは導入していない。現時点はまだテクノロジーの導入期であるため、このVHSとiPadの本人なりの使い分けが、かえって移行にいい影響となり、スムーズになった可能性もある。現時点では、グループホームから自宅へと持ち帰っていた、多数のビデオテープ（大型の旅行カバンいっぱい）の持ち帰り荷物が減ったことは有効であった。

## AIレコメンド機能による興味の拡大

また、YouTubeアプリのAIレコメンド機能によって、新たな動画の存在を目にすることで、これまで見ることのなかった動画コンテンツを視聴するようになったのは、想定外の成果であった。AIレコメンド機能は、画面の右側に、ユーザーが視聴した動画と傾向が近似した動画を提示する機能である。長時間アプリを利用するごとに、紹介される動画の精度が向上してくるが、現時点では、視聴したコンテンツの「年代」と「ジャンル」が近似のコンテンツが紹介されているようである。対象者の場合、「1970年代の刑事ドラマ」「1980年代のテレビCM」などを好んでいるため、かなり高精度で対象者の好みに合ったコンテンツが提供されている。これまでも述べた通り、対象者は、興味が固定化しており、新しいコンテンツに興味を向けることは少なかった。興味が限定されることは、将来的な趣味の継続可能性の減少を意味する。これまで視聴することのなかったコンテンツに目が向くということは、それだけ趣味としての継続可能性が向上しているといえる。

## 趣味を提供する機器としての安定性

VHSビデオデッキを利用していた頃に比べると、機器の故障などのトラブルの発生頻度も激減している。趣味の安定によって、日々の生活と心理的な安定に資することができた。実践開始後の6ヶ月間では、活用が完全に中断するほどのトラブルは発生しておらず、即時対応可能な軽微なトラブル（充電ケーブルの接続不良による充電不足、ネットワーク接続不良、メモリ不足によるハングアップ）が数回発生したのみであった。これらのトラブルへの対処は、ケーブルの接続し直しや再起動といった、ごく短時間で行えるもののみであった。



図6 YouTubeレコメンド機能



## 実践2：支援機器としてのiPhoneの導入

### 導入した機器

・iPhone 5 S

### 考えられるiPhone導入のメリット

対象者は、これまでに連絡手段となる携帯電話を持ったことがなく、初めての取り組みであった。そのため、新規にiPhoneを導入することで、以下のようなメリットがあると考えた。



友達を探す



電話



カメラ



Google マップ



Safari

- ・連絡手段の確保と、それによる単独行動ができる範囲の拡大で、対象者と親の双方の負担を軽減することができる
- ・「Moves」などの、自動的に移動場所をロギングするアプリで、対象者がどんなことに興味があるのか、何を好んでいるのか、どのくらいの時間を要するのかなどの解析できるようにする
- ・アラート「デジタル迷子札」としての管理
- ・カメラアプリを利用することでフィルムカメラからの置き換えを行う
- ・母親もiPhoneを持つことで、GPSでの管理、移動データロギングをする。リアルタイム検索は「友達を探す」機能で対象者が単独行動をする際の行動パターンを見られるようにする

### 「大人ならではの」「支援者が家族ならではの」困難の表面化

ここで、学齢期の児童生徒とは異なる、新たな困難が生じた。「家族からは干渉されたくない」という意思の表出である。対象者にとって、実践者は実の兄である。思春期を過ぎ、成人してからは、対象者本人も、大人としての自覚と意識をもって生活しており、家族からの過干渉をいやがる傾向がある。また他方、中年期障害者は、ずっと「支援される」という立場でもある。支援者は常に絶対的な存在であり、指導的な立場になることが多い。あるいは、対象者の考えにおもねる立場を取られることもあり、極端な二分化をしてしまう。知的障害者にとっては、対等に意見を出し合い、事案について検討しあう相手というのは、得難い状況にある。中年期の障害者は、このような長年の経験によってフラストレーションを蓄積されている状況であることが非常に多いといえる。

対象者は、性格的に非常に温厚であるため、激しく拒否をするような態度に出ることはまれである。しかし、一度「よだきい（大分方言で、面倒である、困難であるの意）」と感じた場合、相手から声をかけられても視線をそらしてその場を離れたり、軽いパニックの状況になってしまうことが多い。そのような状況になると、提案を再度ひきうけることは非常に困難になってしまう。

### 介入の拒否期間

上記のような理由から、実践者による機器の導入が一時的に中断してしまう事態があった。導入から1ヶ月経過し、母親からの報告では、対象者の活用はかなり定着しているとのことであった。そこで、対象者の自宅を訪問し、iPad 動画視聴の様子を確認した。すると、コンセントに充電ケーブルを接続したまま部屋の入り口のゴミ箱の上にiPadを置いて、中腰の姿勢で視聴するという、非常に不自然な状態であった。これは、導入初期の段階で、たまた



図7 iPadをごみ箱の上で充電

ま iPad の充電が不足していたため、充電をしながら視聴することになったことが引き金となっ

ている。その際、機器に対するリテラシーの低い母親の助言で、コンセントにケーブルを接続したまま使用することを勧められ、その仕方が固定化したものと推測される。そこで、対象者に対して、ケーブルを外して机上で視聴するように勧めたところ、自室のドアを閉めて実践者を避けるような行動をとるようになってしまった。それから2か月ほど、実践者が自宅を訪問すると、顔をそらして避けるような様子が続いた。

### 支援者としての義姉の参加

対象者の拒絶感を避けるために、支援者として、対象者の義理の姉（実践者の妻。共同研究者）が参加することとなった。もともと対象者は義理の姉に親しんでいたため、非常に素直に機器の導入へと気持ちを向かわせることができた。iPhone を使って「写真を撮って欲しい」というお願いをされることで、初めて手にする iPhone を使ってみようという意欲を示していた。学校を卒業し、成人となった障害者は、対等の立場で他者と関わったり、他者のために何かをするということがほとんどない。義理の姉という、「近すぎず、遠すぎず」という心理的な距離感が、良い作用を生んだと考える。また、「お願い」をされたことそのものが、機器を活用する直接的なモチベーションとなっていた。

### < iPhone 導入のための「旅行」の実行 >

対象者にとって、機器を活用するための必要感と必然性を高めるため、対象者と支援者、義姉の3人で旅行をするように設定した。iPad を導入する際には、VHS ビデオデッキが故障したタイミングにすることでこだわりを回避するように工夫したが、その時と同様に、できるだけ自然に導入が進められるように配慮したためである。対象者は旅行やドライブなどの外出を非常に好むが、行き先は常に、行き慣れた数カ所の娯楽施設に限定されていた。そこで、今回の旅行では、あえて行き先を初めての場所に設定することで、意識を分散し、機器へのこだわりを回避するようにした。また、初めての場所であることから、「連絡の必要性がある」「居場所の確認の必要がある」「義姉の写真を撮ってその場で渡す」という、活用上の必要感をごく自然に印象付けることができた。行き先の決定にあたっては、義姉と意見を交わし合い、長い時間をかけてお互いに調整していた。ここでも対等の立場であることがよい影響を与えており、新たな行き先への興味・関心を高めていた。



図8 義姉に iPhone の使い方を習う

### 写真撮影手段としての iPhone の活用

VHS ビデオデッキと同様に、これまで使っていたフィルムカメラは、物理的操作（ボタンなど）があるため、こだわりが強くなる傾向があった、iPhone では、これまでに提案してきた代替手段（デジタルカメラ）とは異なり、物理的操作を要しない。操作形態が異なるということは、対象者にとってこだわりを回避するために重要な要素であるため、写真撮影手段としての iPhone も比較的すんなりと受け入れることができた。使ううちに、フィルムカメラにはない「何枚でも撮影できる」というよさを実感していった。もともと対象者は、他の人が気にしないような様々な街中の物（信号機や街灯、建物の模様など）に強い興味を持っていた。しかし、フィルムカメラでは、撮影可能枚数が限定されるため、それらの物を撮影することをためらっていた。



図9 気に入ったものを撮影

対象者のような興味の対象を持つ場合、デジタル保存のカメラは非常に相性が良いことに、自分で気づいていったようである。また、すぐにデータを相手に渡せるという利点も、「お姉さんにすぐに写真をあげたい」という対象者の願いをかなえやすいということに気づいたようである。この日だけで100枚ほどの写真を撮影し、その中から気に入った写真だけを抽出して相手にAirDropで送信するという活用法をすぐに身に付けることができていた。

#### 連絡手段としての iPhone の活用

これまでは、ショッピングモールなどで、興味のある店舗や品物があっても、母親が常に付き添うため、歩調を合わせる必要があり、なかなか好きなどころに行けないという状態であった。連絡手段としての iPhone を持つ代わりに、好きなどころに行つてよという条件は、対象者にとっても必要感を得やすいものだったようである。実際の場面では、支援者側は「友達を探す」アプリを使って、大まかな対象者の位置を把握することができる。もともと、他者に迷惑をかけることなく買い物などを行うことができていた対象者だけに、この活用は、対象者・親ともにメリットが大きいものであることが実感できた。



図 10 居場所をアプリで確認

改めて自由に行動できるようにしてみると、これまでに立ち寄ったことがないような店舗に寄つてみたり、商品を手にとってみたりと、興味の範囲の広がり期待できる姿が多くみられた。

### 実践 3 : 支援者支援としてのスマートスピーカーの導入

#### 親の抱える隠れ困難

ここまでの実践によって、対象者は新たな機器の活用法を獲得することができ、安定した活用を進められていた。前項の通り、トラブルは即時対応可能な軽微なものばかりだったため、基本的には、不具合が起きた際には、対象者が母親にその旨を伝え、母親が電話で実践者に伝えていた。しかしここで、支援者であるはずの親にも、以下のような隠れ困難が内在することが明らかになってきた。

- ・支援者としての機器活用支援のスキル不足と対応の困難
- ・社会的交流の幅の狭まり、いわゆる「情報弱者」化による困難の拡大
- ・高齢化による「買い物難民」化や、災害時などの情報収集の難しさ

#### 定常的な指導・支援者の不在

一般的に、この世代の障害者は、親世代が高齢化しており、機器の操作など、今日的な課題への対応が難しくなることが多い。また、世代的に近く、今日的な支援を行えるきょうだいは独立していることが多く、直接的な支援を常に行うことは困難である

実践者と対象者の自宅は近く、比較的訪問しやすい状況にある。それでも定常的に訪問して支援にあたることは、時間的にも困難であった。平日をグループホームですごす対象者にとって、仕事・生活に関わる支援者はいるが、その基盤となる「趣味」に関わる定常的な支援者がいないことは、永続的なQOLの向上の妨げとなるものであった。

#### 導入した機器

- ・ Amazon Echo Spot



図 11 Amazon Echo Spot



## 活用の方法

- ・カメラと画面を活用した、困った際のFace to Faceによる安心感を持てる会話手段の確保。
- ・ビデオ電話活用によるハンズオンでリアルタイムにレクチャーができる手段の確保

## Amazon Echo Spot 導入の経緯

基本的には、対象者の機器活用上のトラブルに即時対応するための方策としての機器導入である。特に対象者の親は、機器に対するリテラシーが世代の平均よりもやや低いと思われるレベルであり、スマートフォンやタブレットを触ったことがないという状況であった。そのため、タッチ操作などの操作形態への理解・概念がない。即時的な対応が必要であったため、より「早い」「簡単」「シンプル」「直観的」な操作形態が求められた。そこで、音声のみで操作が可能なスマートスピーカーを導入することとした。

現時点で複数のスマートスピーカーが市販されているが、音声認識のしやすさ、画面とカメラを備えていることなどから、Amazon Echo Spotを活用することとした。

## 活用の様子

親は自分からAmazon Echo Spotの前にウェイクアップワード「アレクサ」をメモして、いつでも活用できるように準備をしていた。そして、対象者のiPhoneの充電ができなくなった際やiPadがハングアップした際の対処法などについて、ビデオ電話をかけてくるようになった。画面を見ながらレクチャーするため、電話では伝わらなかった操作方法を直接伝えられるようになり、トラブル時に実践者が訪問することはほとんどなくなった。



図 12 ビデオ電話での支援

## 【まとめと今後の課題】

○**本実践での気づきと課題**について、以下にまとめる。

### 成人障害者とその親への機器導入に際して

リテラシーが低く、テクノロジーになじみが低い場合にこそ、リテラシーに応じた低スペック・古い世代の機器ではなく、最新の機器を活用することが有効であると考えられる。むしろ最新機器は操作が簡易になっていたり、操作形態がこれまでの機器の流れの延長ではなくよりシンプルであったりするため、使用が容易となる場合が多い。これまでの積み重ねがない場合、一気にアップデートすることで、むしろ機器の受け入れがよく、生活の利便性を大幅に向上させることが可能になった。その分、長期的なQOLの向上へと繋がると考えられる。

### 「卒業後の将来」という言葉の重み

「今」だけでなく本当の意味での「将来」を想定することの重要性を感じた。在学中に、完全に30年後を予測することは難しいが、置き換え可能な選択やそのための方策・支援者を想定しておくことが必要であろうと考えられる。

○**今後の機器の活用の想定**

### スマートウォッチの導入

- ・時間・スケジュールの自己管理をすることで生活の見通しを持ち、ストレスを軽減する
- ・外出時のリマインド・タイマーとしての活用をすることで、約束の時間・場所の履行の精度を向上し、対象者と親の相互の負担を軽減する



## スマートスピーカー（Amazon Echo Spot）活用の発展

- ・音声による検索・リマインドなど
- ・音声と画面表示によるスケジュール管理（カレンダーとの連動）
- ・音声によるネットショッピングを可能にし、希望の商品を探し歩く負担とストレスを軽減する。また、親が買い物困難になる将来を見越して、商品を購入し届けてもらえるようにすることで、現在の生活スタイルを維持する。
- ・カメラと画面を活用した、新たなコミュニケーションの広がり

## VRの導入

- ・新しい娯楽施設などへの興味を持ちにくかったり、場所に対する不安感を持ったりすることを払拭できるように、事前に撮影した3DVR動画をVRビューワーで見ることで疑似体験する

## 支援者支援としての母親へのiPad・iPhone導入

- ・GPSでの管理、移動データのロギング
- ・「Moves」などの自動的に移動場所をロギングするアプリで、確認することで、対象者がどんなことに興味があるのか、何を好んでいるのか、どのくらいの時間を要するのかなどの把握ができるようにする
- ・Siriショートカットなど、音声操作での活用可能範囲を最大化する

特に、画面付きのスマートスピーカーは、新たなコミュニケーションを広げる可能性があると考えている。比較的人懐こい性格の対象者だが、実際の対面でのコミュニケーション場面では課題も残る。それは、相手の見た目、におい、周囲の状況、服の生地、質などまで多種多様な要素・要因が複合的に関わり、セントラルコヒーレンスの課題のため、コミュニケーションへのとりかかりを複雑で困難にしているためと思われる。

スクリーンに映るコミュニケーション相手の像は、対象を極小化し、コミュニケーションに関わる情報の抽象化を図ることができると思われ、非常に自然で新たな広がりが期待できる。